2022年9月4日  川越教会

丸山　勉

私を冒す者は誰もない

［ダニエル書3章16～18、23～27節］

「シャドラク、メシャク、アベド・ネゴはネブカドネツァル王に答えた。「このお定めにつきまして、お答えする必要はございません。わたしたちのお仕えする神は、その燃え盛る炉や王様の手からわたしたちを救うことができますし、必ず救ってくださいます。そうでなくとも、御承知ください。わたしたちは王様の神々に仕えることも、お建てになった金の像を拝むことも、決していたしません。」

「シャドラク、メシャク、アベド・ネゴの三人は縛られたまま燃え盛る炉の中に落ち込んで行った。間もなく王は驚きの色を見せ、急に立ち上がり、側近たちに尋ねた。「あの三人の男は、縛ったまま炉に投げ込んだはずではなかったか。」彼らは答えた。「王様、そのとおりでございます。」王は言った。「だが、わたしには四人の者が火の中を自由に歩いているのが見える。そして何の害も受けていない。それに四人目の者は神の子のような姿をしている。」ネブカドネツァル王は燃え盛る炉の口に近づいて呼びかけた。「シャドラク、メシャク、アベド・ネゴ、いと高き神に仕える人々よ、出て来なさい。」すると、シャドラク、メシャク、アベド・ネゴは炉の中から出て来た。」

 [１] 「ダニエル書」―迫害や弾圧の中での言葉

先々週から旧約聖書の「ダニエル書」を読んでいて今日は第二回目です。実はダニエル書の真骨頂は、7章以下にあると言われています。それは、旧約における黙示録だとも言わるように、ダニエルが見た「夢・幻」がたくさん描かれています。丁度新約聖書の最後の「ヨハネの黙示録」が、ヨハネが見た、これから起こる歴史の幻を描写していることと似ています。そして、そのどちらも、その書かれた時代背景が、迫害や弾圧の危機の中であるということです。ですから、その文章はシンボリックな部分があり、ぼやかした表現が少なくありません。しかし、前半の6章までの部分は物語性が強く、少々劇画チックではありますが、困難な時代の中にあっても、信仰を貫くことへの励ましがあると思います。

新約聖書の「ヘブライ人への手紙」の中にも、ダニエル書を意識しての描写があります。このような文章です。11章の、旧約の人物たちの仰を称賛している部分です。32節以下。「これ以上何を話そう。もしギデオン、バラク、サムソン、ダビデ、サムエル、また預言者たちのことを語るなら時間が足りないでしょう。信仰によってこの人たちは国々を征服し、正義を行い、約束のものを手に入れ、獅子の口をふさぎ、燃える火を消し、云々…」とあります。この中の「獅子の口をふさぎ、燃える火を消し」の部分はダニエル書を思い起こしての文章でしょう。後半の「燃える火を消し」が、今日読んで頂いた3章の燃え盛る炉の中でも3人は奇跡的に守られたという部分でしょうし、また「獅子の口をふさぎ」は、6章のダニエルが獅子（ライオン）の穴に落とされながら天使が守って下さったという出来事からの文章だと思います。これは奇跡的な救いという点でよく似ています。ヘブライ書はダニエルと3人の仲間であるシャドラク、メシャク、アベド・ネゴの、世の権力をも恐れず、大胆に自らの信仰に従って生きた彼らを模範としている訳です。

私はこのような所を読んで、「ああ、信仰というのは素晴らしい力だ」と思うこともあると思いますが、それよりも、もしかしたら‟信仰の恐ろしさ”と言いますか、例えば今日の箇所で言うと、3:18で「（たとえ）そうでなくても」とあるように、少々狂信的に思えてしまうところがあるのではないかと思います。真っ直ぐな信仰というのは尊いものでしょう。けれども立ち止まって考えて下さい。

一週間後は丁度9.11です。もう21年が経ちます。あのマンハッタンのツインタワーに突っ込んでいった若者はある意味真面目な信仰者でした。それは日本の戦争中の特攻隊や人間魚雷などにも共通したものがあるように思えてなりません。国家神道というマインド・コントロールがされ、当時の若者は自ら命を捧げさせられたのです。そして人々は彼らを鼓舞する歌を歌い、旗を振って、もう帰ることがない世界へと送り出した。これは「狂気」です。最近はまた旧統一教会の問題が炙り出されていますけれども、「真っ直ぐな信仰」と言った時、それが何に根付くものなのか、ということがとても大事なのではないでしょうか。

[2] この世界・この世の本質

私は思ったのですが今日のダニエル書3章の箇所を読んで、まずバビロンの王ネブカドネツァルが、大きな金の偶像を作り、それに平伏すことを強要したということで、一体何が起こっているかというと、「個人の尊厳」というものが無視をされていることではないかと思います。これはまだ歴史が発展途上である中の話なのでしょうか？実は、「この世界・この世」とは本質的にそのような世界になっていると、聖書は見抜いているのだと思います。王をまるで神格化するような像を拝めと言う。冷静に考えると、王様大丈夫ですか？と言いたくなりますが、3:3には「総督、執政官、地方長官、参議官、財務官、司法官、保安官、その他諸州の高官たちはその王の建てた像の除幕式に集まり、像の前に立ち並んだ」とあります。政治を司る者も、経済界も法曹界も、警察も、地方知事も皆です。この金の像に平伏さなければいけない。彼らの顔も心も、もう死んでいるのです。尊厳が根こそぎ押さえつけられている。それは自分や家族を守る為なのかもしれない。でも彼らの「言葉」はどこにも出てきていませんよね。お人形になってしまっている。このような中で、言葉を発しているのがこの三人です。―シャドラク、メシャク、アベド・ネゴ。彼らは、ネブカドネツァル王の前に引き出され、拝むならばそれで良いがそうでなければ燃える炉に投げ込むと脅します。偶像は私たちを脅すのです。「こうしなければダメ。お前たちは生きられない」と。これはとても現代的だと思います。つい最近もNHKの記者が3年前に過労死に追い込まれた、その謝罪の会見がありました。死亡する前の半年間で休んだのはほんの4日間であったと言われます。命をすり減らして迄、睡眠をどんどんどんどん減らして迄働かなくて良いと思います。けれども「自分よりも働いている人もいる」と思ってしまう。これもある意味変な「宗教」でしょう。そうやって何かおかしな偶像を神化しているのです。それはほんの一例で、私たちは様々な所で、いつのまにか、様々な偶像に深く傷付けられているということがあるでしょう。「お前はこう生きなければいけない」「男は、また女はこうあるべきだ」「そのままではまともな人生を歩めない」「お前の努力が足りないからいけないのだ」「病気は気の持ちようだ」。このような「こうしなければダメ。あなたはこうすべきだ」という「この世」という宗教、「この世界」というどこか当たり前になっている価値観（マインド・コントロール）は、＜私たちの存在そのもの＞を本当の意味で受容してはくれないのです。

［3］ 人を脅かすこの世の力は無力になった

このシャドラク、メシャク、アベド・ネゴは、17節以下でこう王に答えました。「わたしたちのお仕えする神は、その燃え盛る炉や王様の手からわたしたちを救うことができますし、必ず救ってくださいます。そうでなくとも、御承知ください。わたしたちは王様の神々に仕えることも、お建てになった金の像を拝むことも、決していたしません。」 ―彼らは「わたしたちのお仕えする神」がいて、私たちはその神様に生かされているので、きっと救って下さるし、たとえそうでなくても私たちは大丈夫です」と言っているのです。そしてこう続きます。19節。「ネブカドネツァル王はシャドラク、メシャク、アベド・ネゴに対して血相を変えて怒り、炉をいつもの七倍も熱く燃やすように命じた。」しかしその結果はどうだったでしょう。王はその炉の中を見てとても驚きました。25節。「だが、わたしには四人の者が火の中を自由に歩いているのが見える。そして何の害も受けていない。それに四人目の者は神の子のような姿をしている。」そして呼びかけます。「「シャドラク、メシャク、アベド・ネゴ、いと高き神に仕える人々よ、出て来なさい。」すると、シャドラク、メシャク、アベド・ネゴは炉の中から出て来た。総督、執政官、地方長官、王の側近たちは集まって三人を調べたが、火はその体を損なわず、髪の毛も焦げてはおらず、上着も元のままで火のにおいすらなかった。」

この奇跡的な出来事は、私は奇跡と言うよりも、人を脅かすこの世の力、この世の「宗教」は真の神の前には全く無力であり、人を焼き尽くすことはおろか、髪の毛も焦げず、上着も損なわれない！ということが明らかになった出来事なのです。そうです、あのイエス様は仰いました。「あなた方の父のお許しがなければ雀一匹も髪の毛一本すらも地に落ちることはない」（マタイ10:30）と。

私は先ほど「真っ直ぐな信仰」はいいが、それが何に根づくかが大事ではないかと申しました。「狂気」ではなく、「愛」に裏打ちされた信仰です。それは主イエスから来ます。このダニエル書は旧約聖書にあって、イエス・キリストの圧倒的な権威を既に浮き彫りにしていると思います。あの炎の中の4人目の存在は、私たちのあらゆる危機の中に共におられるイエス・キリストの前触れのように思います。そしてイザヤ書が告げるように、彼の打ち傷、彼の贖いの死によって、彼（イエス）が私たちの罪の故に滅び、かえって私たちに命を賜うという出来事がここに表されていると思います。6章のライオンの穴から救われたダニエルも、獅子がいるあの絶望の穴にきっとイエス・キリストが共にいて下さったのです。

私は新約のヨハネ福音書12:31-32の言葉を思い起こしました。それを分かち合いたいと思います。です。「今こそ、この世が裁かれる時。今この世の支配者が追放される。私が地上から上げられる時、すべての人を自分のもとへ引き寄せよう」。―主の十字架と復活によって、この世の悪魔的な力、人を滅びへと脅かす全ての力は駆逐されてしまったのです！この世の宗教ではない、わたし自身をあなたの中に受け入れて欲しい、と神様は私たちに声をかけて下さっているのではないでしょうか。その時私たちは本当に自由な者として頂けると思います。主はご自身の晩餐式も、私たちに世の終わり迄ずっと続けるようにと残して下さったのです。さあ、主のお約束を、主の晩餐式を通しても、私たちのものとさせて頂きましょう。今、私たちを冒すもの、脅かすものは何もないのです。お祈り致します。

「神はその独り子をお与えになったほどに世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで永遠の命得るためである」（ヨハネ3：16）愛する主よ、この世界は私たちを脅かすもの、否定するもので満ちています。しかしあなたは私たちの存在そのものを愛して下さいます。私たちには「私の仕える神」がいて下さることを感謝致します！どうぞ、いかなる時も私たちの手を握って下さい。私たちがこの世界の向こう、またこの世界の只中に、いつもあなたの愛を見出させて下さいますように。主イエス・キリストのお名前によって祈ります。アーメン。